

2025年3月16日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教29「愛がなければ」

申命記18：15～18、ヨハネ5：41～47

ここには、イエスさまの厳しいご批判、叱責があります。「あなたたちの内には神への愛がないことをわたしは知っている」（42節）「互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしないあなたたちに、どうして信じることができようか」（44節）「あなたたち」とは、ここではユダヤ人を指していますが、しかし、わたしたちにも当てはめることができます。神さまへの愛がない。人からの栄誉は喜んで受けるのに、神さまからの誉れは求めない。それでどうして神さまを信じていると言えようか。このような厳しいイエスさまの御言葉の前に立つ時に、わたしたちは、自分自身の神さまへの愛、信仰を点検する必要があります。

神さまへの愛を確かめるその試金石となるのは、今日のところで出てきます「誉れ」（ドクサ）という言葉です。「栄光」とも訳されます。福音書の最初のところ、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」（1：14）とあります。これは受肉、まことの神さまがまことの人としてお生まれになられたことを言い表しています。また第17章にはイエスさまの祈りがありますが、そこにも「栄光」という言葉が何度も繰り返されます。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください」（17：5）この「時」というのは、この祈りの後でイエスさまは捕らえられて十字架にかけられる、その「時」を指しています。そのように受肉から十字架へと続くイエスさまのこの地上での歩みは、どこまでも神さまの栄光を現す歩みでありました。

わたしたちはどうでしょうか。神さまの栄光のために日々歩んでいるでしょうか。むしろ、わたしたちは、神さまからの栄光よりも人からの栄光ばかり求めています。人からどう見られているか。人からの評価、評判は気にするかもしれない。けれども神さまからどう見られているかはあまり気にかけていない。人から良く思われたいという思いは誰でもあります。しかしそれが過度に出してしまうと、それがストレスになり、病気にまでなってしまうこともあります。「ルッキズム」（外見至上主義、容姿至上主義）という言葉があります。容姿ばかり気になって、それがコンプレックスになって、無理なダイエットしたり、繰り返し整形をしたり、それでかえって体を壊すようなことになってしまう。また学歴や職業で人を見る人は多いのです。わたしなども立場上、時々人の履歴書などを見る機会がありますが、それだけを見て感心するようなこともあります。履歴書一枚で、人を評価してしまうようなことをしてしまう。そういう時、つくづく人間はそういう外面的な評価に弱い存在だと思えます。どうして人は神さまよりも人の目を気にするようになったのでしょうか。

その根本には、やはり罪があります。創世記のアダムとエバが神さまとの約束を破ったときに、神さまから姿を隠すところがあります。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから」（創世記3：10）御前から姿を隠す。それがすでに神さまの栄光を受けられなくなっている人間の状態です。しかも「裸ですから」と言います。それはありのままを見せられない。自分を何かで覆い隠して、自分を良く見せようとする。もちろん神さまはすべてご存知ですが、人はごまかせるのです。それゆえに神さまの栄光を受けられなくなってしまう人間は、神さまではなく人にその栄光を求めるようになっていき

ました。人間同士で讃え合い、それで満足するようになるのです。

ユダヤ人たちの問題もそこにありました。彼らこそ、神さまを愛し、御言葉に忠実に生きようとした熱心な人たちでした。けれども、その熱心は間違った方向へ向かいます。神さまの眼差しよりも、人からどう見られるか。彼らの熱心さや禁欲的な生活は、むしろ自己栄化へと進んでいきました。そのようにして神さまへの愛は失われていきました。彼らの信仰は、ただ表面的に演じるような、パフォーマンス化されていきました。イエスさまは山上の説教の中でそういうユダヤ人たちを「偽善者」と言われ、痛烈に批判されました。

それは決して他人事ではありません。わたしたちの問題なのです。そうやってわたしたちは愛をごまかしています。神さまへの愛をごまかし、人への愛もごまかして生きようになる。この罪から救われないと、わたしたちは生涯このような偽りから抜け出せないのではないのでしょうか。ありのままを生きること、心から誰かを愛したり、赦したりすることができなくなってしまうでしょう。それは恐ろしいことではないのでしょうか。

でも、イエスさまは言われました。「わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ」(45節) この「モーセ」という言葉で表されているのは他でもない律法です。その律法にてらせば、わたしたちは罪に訴えられても仕方がないのです。神さまへの愛がないのですから。それでも、わたしたちの心の中をすべてご存知のイエスさまが、わたしたちを訴えないとおっしゃる。どうしてでしょう。それはイエスさまがわたしたちに代わって訴えられ、十字架で死んでくださったからです。この後、第8章では、姦通の現場で取り押さえられた女性の話が出て来ます。姦通罪は死罪です。けれどもイエスさまはその女性に言われました。「わたしもあなたを罪に定めない」(8:11) どうして訴えられないのか。どうして罪に定められないのか。イエスさまが代わって十字架で死んでくださったからです。

それがイエスさまの愛です。このように偽りで塗り固められたような人生だからこそ、イエスさまが、このような神さまも人も愛せないわたしを愛して下さり、その身をささげてくださいました。結局、わたしたちには、このイエスさまの愛しか残らないのではないのでしょうか。わたしたちは、自分の中のなけなしの愛を振り絞るような愛で愛するのではない。「これで愛せた」などと胸を張って言える者ではないのです。愛もない、信仰もない。何にもないこのわたしをただ愛し、ただ赦して下さる。そのイエスさまの愛こそ、偽りではない、真実な愛です。わたしたちの中にはこのイエスさまの愛しかありません。ただイエスさまの愛において、わたしたちは御前に尊いのです。

天の父よ。自らを振り返れば、あなたへの愛がないことは明らかです。でもだからこそイエスさまが来て下さり、その命を持って愛を注ぎ尽くしてくださいました。そしてよみがえりによって、神さまを愛し、人を愛する新しい命を与えてくださいました。どうぞこの恵みに生かされ、この愛に應えていく歩みを与えてください。主の御名によって祈ります。アーメン。